

その風景は 哀しくなるほど 美しい



プロバンスの鷹の巣村
ゴルド *Gorde*



「天空の街」を感じる風景



天空の街を守ってきた城塞



近くの高台からは、くすんだ朱色の瓦とハチミツ色の石灰石でできた、美しい街並みが望めます。丘上にある中世の城塞と教会に寄りそうように、石積みの家々が棚田のように取り囲んでいます。

ゴルドは、「鷹の巣村」とよばれるプロバンスの丘上集落のひとつ。ヴォークリーズ山地からリュベロン平原に張りだした、標高350mの尾根の先端にあります。

石灰岩の露われた崖、そこにへばりつく石積みの家、その隙から湧き立つように生える糸杉などの緑。その風景は、一生忘れられないほど印象的です。

街に入ったときに目に飛び込むのが巨大な城塞です。外敵の唯一の進入口にあたる、尾根の付け根にあり、街を守る巨人のように聳え立ちます。

巨人の脇をすりぬけて街に入り、石畳の迷路を彷徨い歩きます。つづれ折りの坂道を下り、そして階段状の急坂を上る。外壁や門扉の連なりが途切れたとき、建物のすき間から大地と空の広さを感じると、あらためて気づくことがあります。ここは天空の街なのだと。



過酷な戦乱の歴史が昇華した 美しい風景

アルピユ山脈

レ・ボード・プロバンス



荒い石灰台地に築かれた砦集落
レ・ボード・プロバンス
Les Baux de Provence

プロバンスの西端、ローヌ川河口の左岸にアルピユ山脈(Les Alpilles)があります。その麓はオリーブしか育たない痩せた石灰石の地。

その地を睥睨するかのよう、白く荒々しい石灰岩の城塞がそびえ立ちます。小さな街レ・ボード・プロバンスは、城塞に寄りそうにたたずんでいます。

風化した石積みの外壁やすり減った石畳に、長い時の流れを思わずにはられません。

緩やかな勾配の石畳の路地、小さな広場と木陰のテラス、路地沿いの小口石積みの門扉、ところどころにある天に伸びる糸杉が、風化した景色を収束させています。

この街は、地中海から大西洋に抜ける交通の要所にあるため、古くから戦乱の舞台となってきました。山の南麓に石灰岩が大きく露出したレ・ボードの台地があり、そこが砦に選ばれたのです。

15世紀までは付近一帯を治める領主の城塞がおかれ、17世紀ユグノー戦争末期には、プロテスタントの牙城となりますが、フランス王家の宰相リシュリュー枢機卿軍の攻撃により廃墟となります。



鷹の巣村 過酷な歴史が作りだした街の形

ローヌ川下流の左岸、プロバンス地方には、「鷹の巣村」とよばれる小さな村々が点在しています。
城塞と教会、そして民家が一体となった、崖上に成立した集落です。

戦争の絶えなかった中世。
日本では、砦や城が山頂に築かれてきましたが、城下町や平時の領主館は城山の麓にありました。山頂では生活できないからです。
しかし、フランスでは山頂に集落が形成されたのです。

フランスは有史以来、つねに戦場でした。
ケルト、ローマ、ゲルマン諸部族の抗争に加え、イスラムやノルマンの脅威にさらされ、近年では、普仏戦争そして2度の世界大戦でも戦場となりました。
地続きの国の宿命なのかも知れません。

異民族、異教徒の侵略に怯えなければならない人々は、自衛の手段として、断崖の砦に寄りそうことで、終の棲家としたようです。

特にプロバンス地方は、地中海から大西洋岸にぬけるヨーロッパの交通の要所に位置します。アルプス山脈とフランス中央山塊の間から地中海にそそぐローヌ川にそった交通路の入口にあたり、古来より戦乱の舞台だったのです。

異民族に蹂躪されたことのない日本人には到底理解できない、過酷な歴史が作りだした街の形だと思います。

辛い歴史を生き抜いた街は、いま静かな時の流れにあります。
その美しさは哀しい歴史が昇華した姿なのです。

鷹の巣村 エズ (Eze)



鷹の巣村 グルドン (Gourdon)



人が住まうことで、街は美しさを保っている



街は観光で成り立っています。
人の住まない街は荒廃します。
このような厳しい場所では、観光を業をする以外に住むことはできません。
観光地化された風景を嘆く人もいますが、いまの時代にあって、それはやむを得ないことのように思います。

[まちあるきの考古学](#)